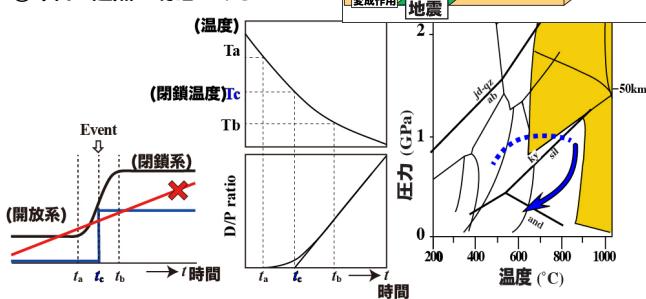
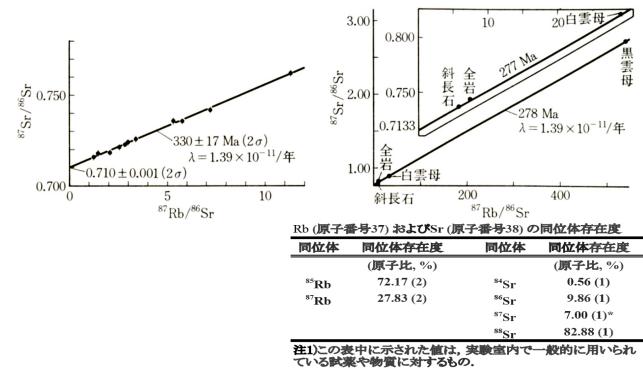


放射年代測定法の仮定

- ①放射壊変定数の不变性
- ②年代変化を生じる現象の生成率が一定
- ③初期値が得られる。△。
- ④閉鎖系。
- ⑤年代の起点が明確である。

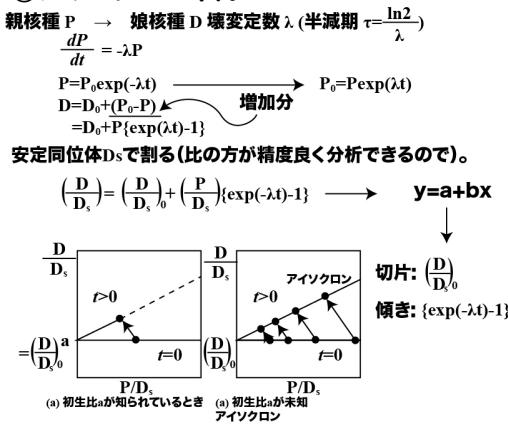


放射性核種の親核種と娘核種の比を用いる年代測定



放射性核種の親核種と娘核種の比を用いる年代測定

①アイソクロン年代



放射性核種の親核種と娘核種の比を利用する年代測定

①アイソクロン年代

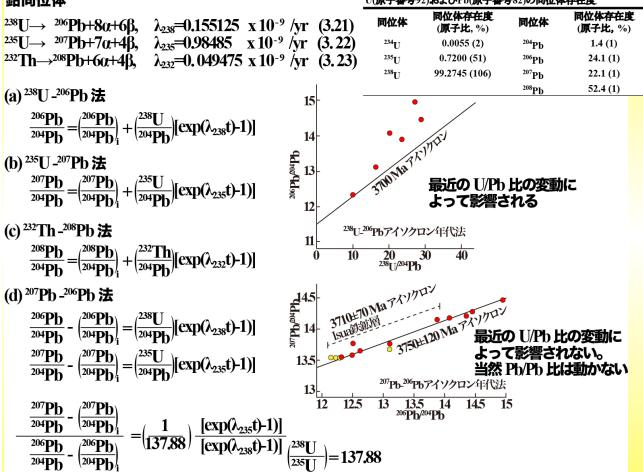
表2.2 放射性核種の親核種と娘核種の比を利用する年代測定法

方法	P	D	Ds	(D/Ds) ₀	衰変形式	半減期(年)
K-Ar (Ar-Ar)	⁴⁰ K	⁴⁰ Ar	³⁶ Ar	=295.5	電子捕獲(EC)	$1.25 \times 10^{9}*$
Rb-Sr	⁸⁷ Rb	⁸⁷ Sr	⁸⁶ Sr	(⁸⁷ Sr/ ⁸⁶ Sr) ₀	β^-	4.88×10^{10}
U-Pb (Pb-Pb)	²³⁸ U	²⁰⁶ Pb	²⁰⁴ Pb	(²⁰⁶ Pb/ ²⁰⁴ Pb) ₀	α, β^-	4.47×10^9
	²³⁵ U	²⁰⁷ Pb	²⁰⁴ Pb	(²⁰⁷ Pb/ ²⁰⁴ Pb) ₀	α, β^-	7.04×10^8
Th-Pb	²³² Th	²⁰⁸ Pb	²⁰⁴ Pb	(²⁰⁸ Pb/ ²⁰⁴ Pb) ₀	α, β^-	1.40×10^{10}
Sm-Nd	¹⁴⁷ Sm	¹⁴³ Nd	¹⁴⁴ Nd	(¹⁴³ Nd/ ¹⁴⁴ Nd) ₀	α	1.06×10^{11}
Lu-Hf	¹⁷⁶ Lu	¹⁷⁶ Hf	¹⁷⁷ Hf	(¹⁷⁶ Hf/ ¹⁷⁷ Hf) ₀	β^-	3.57×10^{10}
La-Ce	¹³⁸ La	¹³⁸ Ce	¹⁴² Ce	(¹³⁸ Ce/ ¹⁴² Ce) ₀	β^-	$9.87 \times 10^{10}**$
La-Ba	¹³⁸ La	¹³⁸ Ba	¹³⁷ Ba	(¹³⁸ Ba/ ¹³⁷ Ba) ₀	電子捕獲(EC)	
Re-Os	¹⁸⁷ Re	¹⁸⁷ Os	¹⁸⁶ Os	(¹⁸⁷ Os/ ¹⁸⁶ Os) ₀	β^-	4.23×10^{10}

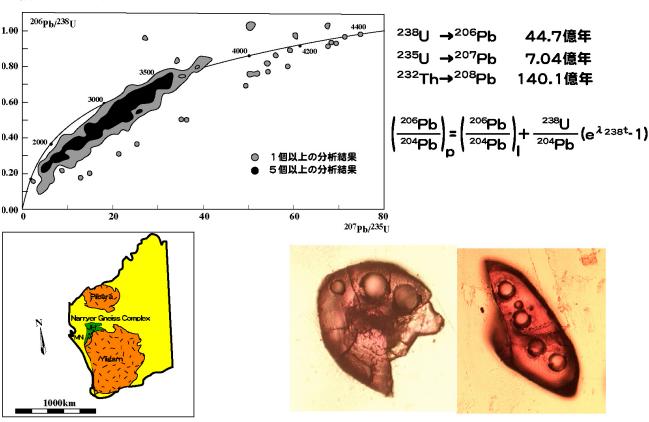
*⁴⁰Kとしての半減期、⁴⁰Kは電子捕獲のほかに β^- 崩して⁴⁰Caを生成するので、⁴⁰K-⁴⁰Ca系を利用した年代測定も原理的には可能である。しかし、天然の⁴⁰Caの存在割合が多いので放射性起源⁴⁰Caとの区別が困難なので、Kに言んだ特殊な試料以外には試みられていない。

**¹³⁸Laとしての半減期

鉛同位体



最古の鉱物



一致年代、不一致年代

238U-206Pb法、235U-207Pb法、232Th-208Pb法、232Th-206Pb法から得られた年代が一致することを一致年代(concordance)と言う。一方、一致しない場合を不一致年代(disconcordance)という。

(a) U-Pb年代

$$\frac{206}{238}\text{Pb} = \frac{206}{238}\text{Pb}_0 + \frac{238}{238}\text{U} \cdot (\exp(\lambda_{238}t) - 1) \rightarrow \frac{206}{238}\text{Pb} = \frac{206}{238}\text{Pb}_0 \cdot \exp(\lambda_{238}t) \rightarrow \frac{206}{238}\text{Pb} = [\exp(\lambda_{238}t) - 1]$$

$$\frac{207}{235}\text{Pb} = \frac{207}{235}\text{Pb}_0 + \frac{235}{235}\text{U} \cdot (\exp(\lambda_{235}t) - 1) \rightarrow \frac{207}{235}\text{Pb} = \frac{207}{235}\text{Pb}_0 \cdot \exp(\lambda_{235}t) \rightarrow \frac{207}{235}\text{Pb} = [\exp(\lambda_{235}t) - 1]$$

($\frac{206}{238}\text{Pb}$) = ($\frac{207}{235}\text{Pb}$) = 0 のとき、元々 Pb(娘核種)が含まれない時

$$t = \frac{1}{\lambda_{238}} \ln \left[1 + \left(\frac{206}{238}\text{Pb} \right) \right]$$

$$t = \frac{1}{\lambda_{235}} \ln \left[1 + \left(\frac{207}{235}\text{Pb} \right) \right]$$

$$\frac{206}{238}\text{Pb} = \left[\left(\frac{207}{235}\text{Pb} \right) + 1 \right]^{\frac{1}{\lambda_{235}}} - 1$$

宇宙線生成放射核種を利用する年代測定

14C年代測定法

¹⁴Cが中性子(n)を捕獲して、陽子として放出し、¹⁴Cになる。
¹⁴Cは半減期730年でB壊変して¹⁴Nに戻る

$\frac{dN}{dt} = -N\lambda + N_0$ ○ 宇宙線があたっているからは同位体平衡に達していて、宇宙線量は線度であるが大気循環により炭素同位体値は均質

宇宙線照射による生成死んだりすると炭素の取り込みがなくなるのでC=Oとなる

$$N = N_0 \exp(-\lambda t) \rightarrow t = \frac{1}{\lambda} \ln \left(1 + \frac{N_0}{N} \right)$$

○ 半減期はリビーの5568年を用いる(最近、¹⁴Cの半減期は改訂され、5730年とされているが、慣例として過去のデータに混乱を来すので5568年を使う)。

○ 年代は2000BP(Before Physics)のようにあわすが、これは現在から2000年前という意味ではなくて、1950年から2000年前という意味。戦後の原水爆実験のために¹⁴C値が異常になってしまった。

○ 適用範囲: 現在から5~6万年前

○ 適用試料: 木炭など生物由来有機物、サンゴなど炭酸塩石、鉄器、地下水、海水中の溶存炭素。

○ 仮定 ① 宇宙線量は一定(最近は補正がある: 右図)

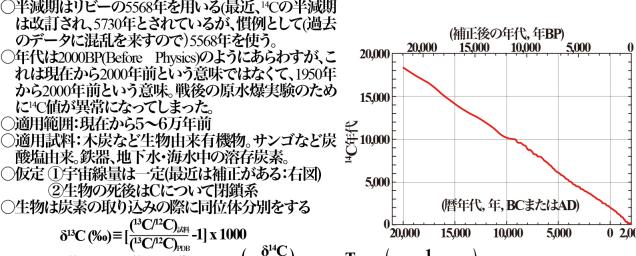
② 生物の死後はC-14を逃さない(閉鎖系)

○ 生物は炭素の取り込み際に同位体分別をする

$$\delta^{14}\text{C} (\%) = \left(\frac{^{14}\text{C}_{\text{sample}}}{^{14}\text{C}_{\text{air}}} - 1 \right) \times 1000$$

$$\Delta^{14}\text{C} (\%) = \delta^{14}\text{C} - 2 \cdot \delta^{14}\text{C}_{\text{air}} + 25 \times \left(1 + \frac{1}{1000} \right)$$

$$t = \frac{1}{0.693} \ln \left(\frac{1}{1 + \frac{\Delta^{14}\text{C}}{1000}} \right)$$



宇宙線生成放射核種を利用する年代測定

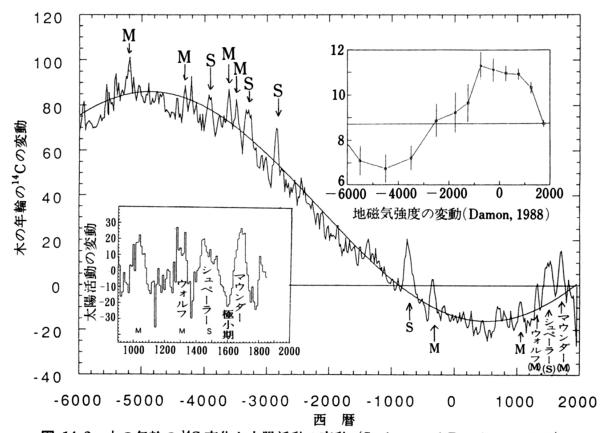
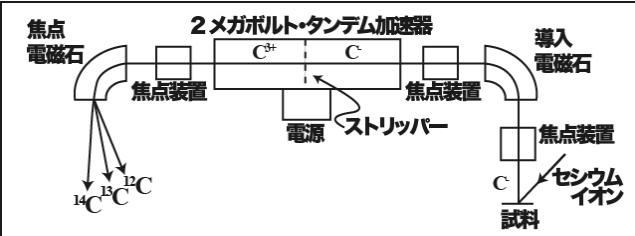
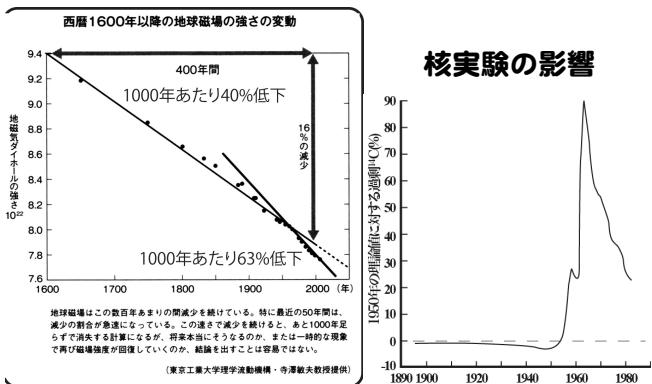
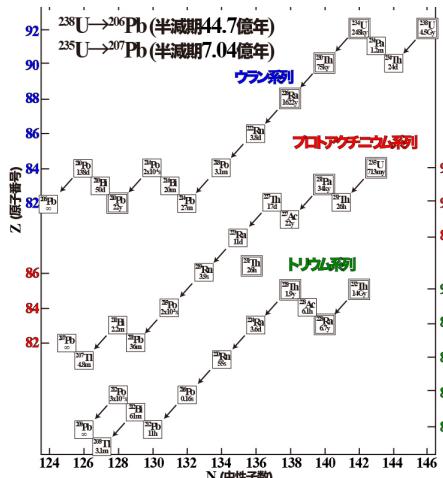


図 14.2 木の年輪の¹⁴C 変動と太陽活動の変動 (Stuiver and Braziunas, 1988)
太陽活動の衰退期にはマウンダー・タイプ (M) とシェーバー・タイプ (S) がある。右下の太陽活動の変動曲線は木の年輪の¹⁴C を基に補正を施し求められている。

環境(気候)の周期(地球磁場の変動)



放射平衡から のずれを利用して した年代測定



宇宙線生成放射核種を利用する年代測定

表2.3 宇宙線により生成した核種を利用す年代測定法

方法	P	P_0	壊滅後の核種	半減期(年)
¹⁴ C	¹⁴ C	¹⁴ Cが大気中で一定	¹⁴ N	5.73×10^3
¹⁰ Be	¹⁰ Be	¹⁰ Beの生成率が一定	¹⁰ B	1.51×10^6
²⁶ Al	²⁶ Al	²⁶ Alの生成率が一定	²⁶ Mg	7.16×10^5
³ H	³ H	³ Hが大気中で一定	³ He	1.24×10^{10}
³² Si	³² Si	³² Siの生成率が一定	${}^{32}\text{P} \rightarrow \beta^- \rightarrow {}^{32}\text{S}$	1.05×10^2 (14.3d)
³⁶ Cl	³⁶ Cl	³⁶ Clの生成率が一定	³⁶ Ar	3.01×10^5
⁴¹ Ca	⁴¹ Ca	⁴¹ Caの生成率が一定	⁴¹ K	1.03×10^5
⁵³ Mn	⁵³ Mn	⁵³ Mnの生成率が一定	⁵³ Cr	3.7×10^6
¹²⁹ I	¹²⁹ I	¹²⁹ Iの生成率が一定	¹²⁹ Xe	1.57×10^7
³⁹ Ar	³⁹ Ar	³⁹ Arの生成率が一定	³⁹ K	2.69×10^2
⁸¹ Kr	⁸¹ Kr	⁸¹ Krの生成率が一定	⁸¹ Br	2.13×10^5

表中にあげた方法のほか、これらの核種を組み合わせた年代測定法なども開発されている。

(例) ³H/³He, ²⁶Al/¹⁰Be, ¹⁰Be/³⁶Clなど。

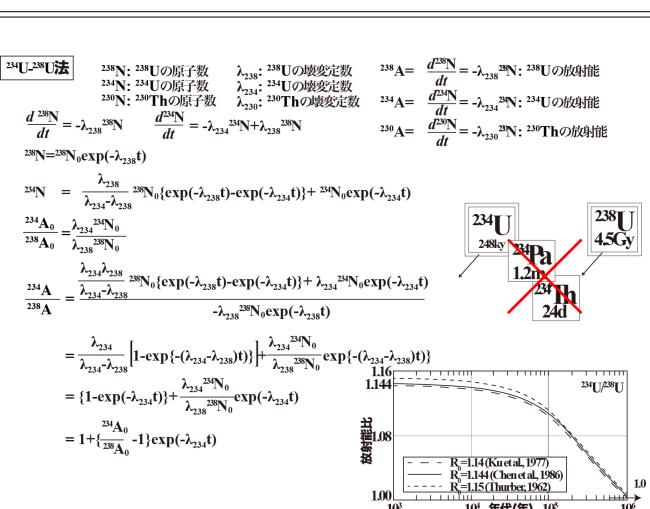


表2.4 放射壊滅系列における放射平衡からのずれを利用してした年代測定法

方法	原理	半減期(年)
²³⁰ Th(Io)- ²³⁴ U	²³⁰ Th/ ²³⁴ Uの年代変化を利用	²³⁰ Th: 7.54×10^4 ²³⁴ U: 2.48×10^5
²³¹ Pa- ²³⁵ U	²³¹ Pa/ ²³⁵ Uの年代変化を利用	²³¹ Pa: 3.28×10^4 ²³⁵ U: 7.04×10^8
²²⁶ Ra- ²³⁸ U	²²⁶ Ra/ ²³⁸ Uの年代変化を利用	²²⁶ Ra: 1.60×10^3 ²³⁸ U: 4.47×10^9
²³⁴ U- ²³⁸ U	²³⁴ U/ ²³⁸ Uの年代変化を利用	
²³⁰ Th(Io)	過剰 ²³⁰ Thの存在を利用	
²³¹ Pa	過剰 ²³¹ Paの存在を利用	
²¹⁰ Pb	過剰 ²¹⁰ Pbの存在を利用	²¹⁰ Pb: 2.23×10^0
²³⁰ Th(Io)- ²³² Th	過剰 ²³⁰ Th/ ²³² Thの存在を利用	²³² Th: 1.41×10^{10}
²³¹ Pa- ²³⁰ Th(Io)	過剰 ²³¹ Pa/過剰 ²³⁰ Thの存在を利用	

これらの方は、主として大気や海水中などのように平衡状態になりやすい系に多く用いられるが、一部の方法は地下のマグマなどに関連した現象にも用いられている。

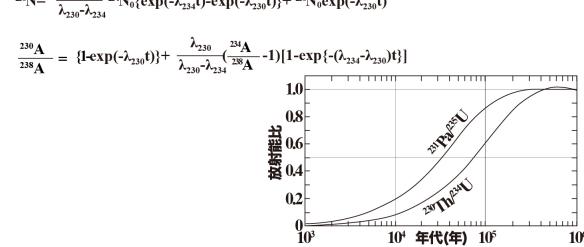
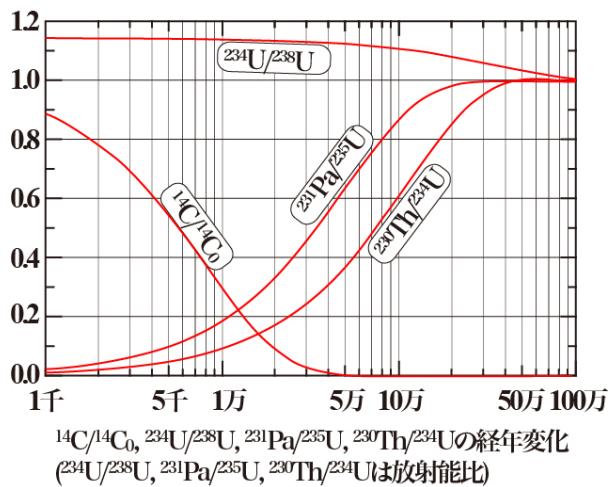


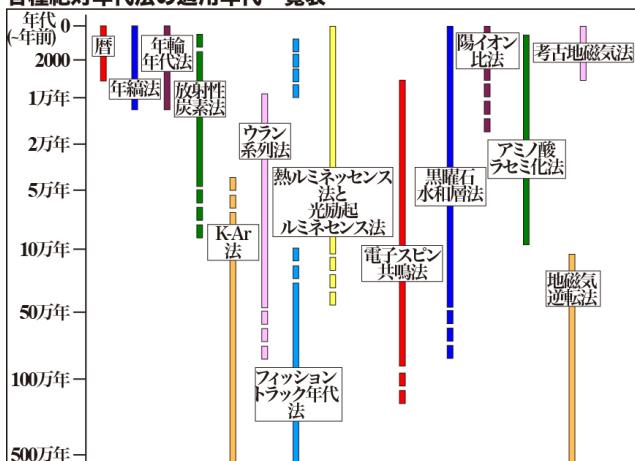
表2.5 放射線損傷を利用した年代測定法

方法	原理	関連する核種の半減期(年)
FT (フィッショントラック)	^{238}U の自発破裂反応の際に生じる飛跡の数が、年代とU含有量の関数であることを利用	^{238}U の自発破裂反応 (0.8~1) $\times 10^{16}$ 年
TL (熱ルミネッセンス)	放射性核種の衰変の際に放出されるエネルギーにより励起された遊離電子としての捕獲電子数が年代の関数になり、加熱による発光現象を測定を利用して	^{238}U : 4.47 $\times 10^9$ ^{235}U : 7.04 $\times 10^8$ ^{232}Th : 1.41 $\times 10^{10}$ ^{40}K : 1.25 $\times 10^9$ など
ESR (電子スピン共鳴)	放射性核種の衰変の際に放出されるエネルギーにより生じる不対電子数が年代の関数となり、その量を電子スピン共鳴として測定	TLの場合と同様

* ^{238}U の自発破裂反応に関する半減期の値は測定方法などにより系統的な差があり、まだ統一された値は報告されていない。

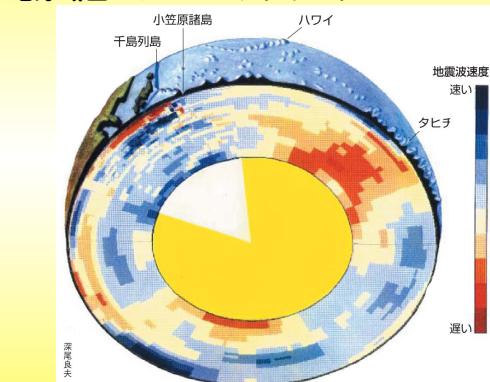


各種絶対年代法の適用年代一覧表

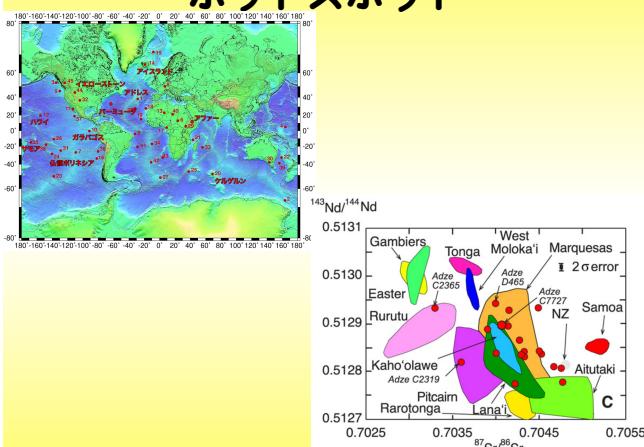


地球内部の微細構造

地球断面とブルームテクトニクス

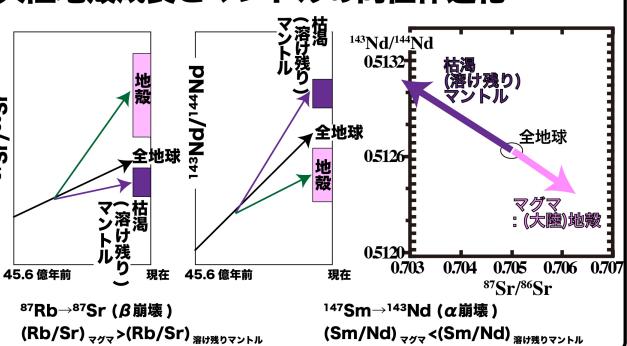


ホットスポット

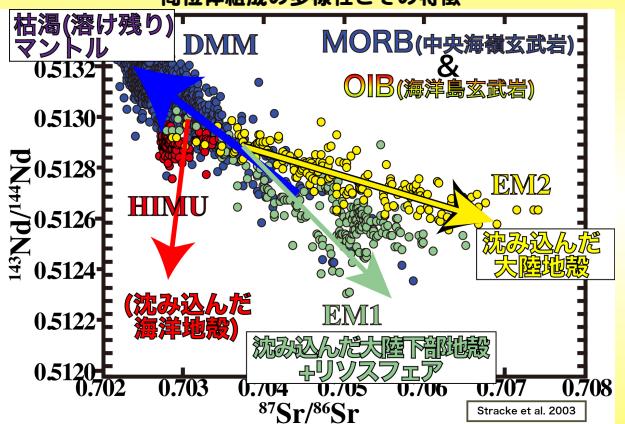


同位体の組成の多様性はどのようにして生じるのか

大陸地殼成長とマントルの同位体進化



中央海嶺玄武岩とホットスポットマグマの同位体組成の多様性とその特徴



太平洋の文化交流

